

教 育 長 様

校番 004 広 高等学校長

「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校
令和2年度 報告書

1 研究の概要

<p>研究の目標</p> <p>主体的・協働的な活動を通じた探究的な学びによって、コンピテンシーを育むカリキュラム開発及び評価の在り方の工夫・改善についての研究</p>							
<p>総合的な探究の時間等の取組内容</p> <p>① 生徒の状況把握及び分析</p> <p>本校は、「総合的な探究の時間（おおいなる夢）」を核として、すべての教育活動を通じて、育てたい生徒像の実現に向け、生徒一人一人の資質・能力（コンピテンシー）を育てている。</p> <p>「総合的な探究の時間」の実施が、令和元年度入学生から始まったことに伴い、これまでの本校の「総合的な学習の時間」の教育内容を見直し、新たなカリキュラム開発を進めてきた。そこでは、『探究的な学び』をより“真正”なものへと近付けるために、生徒の“本気度”や“期待感”を高めるしかけを作り出すこと、「成果物を完成させることだけを目的とするのではなく、その過程を重視すること」、「学校内外の関係者である第三者等からの外部評価を適宜受けること」等を視点においたものとした。令和元年度入学生（現2学年）の第1学年の2学期末までに行った生徒の資質・能力（コンピテンシー）に関する自己評価の結果は、次の通りであった。</p>							
育成を目指す 資質・能力	CS (Core Skill)			CA (Core Attitude)			
	①論理的・批判的思考力	②対話力	③表現力	④積極性	⑤協働性	⑥柔軟性	⑦創造性
1年4月	2.7 (64.5%)	2.9 (71.1%)	2.6 (55.3%)	3.0 (73.6%)	3.0 (79.2%)	2.9 (74.6%)	2.7 (60.9%)
1年7月	2.8 (67.0%)	3.0 (74.9%)	2.6 (51.1%)	3.0 (74.5%)	3.1 (79.8%)	2.9 (72.2%)	2.6 (55.3%)
1年12月	2.7 (66.7%)	2.8 (66.7%)	2.6 (55.2%)	2.7 (57.3%)	2.7 (60.4%)	2.7 (59.4%)	2.7 (63.0%)
<p>※平均値……4段階尺度で評価したものの平均値 ※肯定的評価の割合……「4」もしくは「3」と評価した生徒の割合</p> <p>第1学年2学期末（12月）の自己評価では、その平均値、肯定的評価の割合の数値のいずれもこれまでの数値と比べて低下した。これは、見通しのもちにくい、探究的かつ協働的な学習活動を、生徒一人一人が主体的な学びを通じて、試行錯誤を繰り返しながら進めてきた結果であり、多くの生徒が、自身のそれぞれの資質・能力（コンピテンシー）に関して、メタ認知能力を高めたものと分析する。生徒の“本気度”を高めるような探究活動がその背景にあるものと考えられる。これを受け、令和2年度（第2学年）は、育てたい生徒像の実現に向け、学校全体で育成する資質・能力（コンピテンシー）について、生徒のメタ認知能力の高まり及び生徒の自己肯定感を高めることができるようなカリキュラム開発及び指導の在り方について更なるカリキュラム開発を進めることとした。</p> <p>② 育成する資質・能力（コンピテンシー）の設定（共有）</p> <p>平成30年度に整理した学校全体で育成する資質・能力（コンピテンシー）の指標について、学習指導要領が定める学力の三要素をふまえた「育成をめざす資質・能力」の三つの柱から落とし込まれているかを検証し、再度、見直しを進めた。これらの過程については、全教職員によるワークショップ型の校内研修の実施等により、全教職員に参画意識をもってもらうなどして策定した。そこで、「論理的・批判的思考力」を「論理的思考力」に、「対話力」を「課題設定力」に設定（見直し）し、それに基づくマスタールーブリックを策定した。</p> <p>③ 資質・能力（コンピテンシー）の育成に向けた各種計画の作成</p> <p>令和元年度、コンピテンシーベースのカリキュラムマップである「学びのグランドデザイン」を策定した。これは、生徒及び教員が、本校で実施する教育活動のそれぞれが、育成を目指す7つの資質・能力（コンピテンシー）のいずれに該当するかを明確にするとともに、3年後を見通して、どの時期に、いずれの教育活動でいかに資質・能力（コンピテンシー）を育み、自己の生き方・在り方を確立させ、行動するかを主眼においたものである。</p> <p>これを基に、育成する資質・能力（コンピテンシー）を踏まえた各種計画においては、全教職員が当事者意識をもって参画するための方法として、次のことに取り組んだ。</p> <p>(ア) 管理職を含め校内の各分掌、学年、教科を横断するメンバーで構成される「課題発見・解決学習推進プロジェクト会議」で「総合的な探究（学習）の時間」の指導原案を検討した上で、各学年会で指導方針を決定したこと。</p>							

- (イ) 各学年の「総合的な探究(学習)の時間」の授業実施後の振り返り(意見交換)を充実させ、個々の教員が行った効果的な指導方法等を情報共有し、他学年へも浸透させたこと。
- (ウ) 「総合的な探究(学習)の時間」の授業実施時においては、指導の過程で各クラスの授業担当者間で情報交換を行い、場合によっては、展開途中においても弾力的に指導方法を修正するなどの工夫を図ったこと。
- (エ) 教科横断型の相互授業観察を実施し、7つの資質・能力(コンピテンシー)を各教科でどのように身に付けさせているかの観点に基づいた研究協議を実施したこと。

④ ③に基づく教育活動の実施状況

ここでは、第2学年の「総合的な探究の時間(おおいなる夢II)」における「社会探究活動」のカリキュラム開発の具体について触れる。今年度は、特に、新型コロナウイルス感染対策や、感染拡大に伴う社会状況の変化を見据えた指導形態の在り方も求められた。生徒の探究活動の一連の過程で、生徒の学びの質及び“本気度”や“期待感”を高めるしかけとして、

- (ア) 大学教員によるワークショップ型の講演会の実施(「課題の設定」及び「整理・分析」、「まとめ・表現」)
- (イ) あらゆる方策を用いたフィールドワークの実施(「情報の収集」)

課題研究の過程においては、学校外に出て、実社会(地域社会、行政、産業界(企業)、大学等)との接続を通じて、課題の解決の方策について、より“真正”なものへ近づくことを企図した。例として、オンラインセッションの参加による大学生へのインタビュー、官公庁などへ出向いてのインタビューの実施などである。

- (ウ) リモートを活用した校内課題研究発表会及び近隣の高等学校との課題研究合同発表会の実施(「まとめ・表現」)
- また、指導の過程については、それぞれの生徒の状況を見極め、教員が対話を重ねることで、更なる探究活動の在り方を模索させ、自己決定を促すファシリテートを基本とした。また、生徒同士の協働的な学び等を通じてその在り方を主体的に身に付けさせること、振り返りを充実させ更なる学習活動に向かわせることをポイントとした。

⑤ 評価活動(ループリック等の活用等)

探究活動のそれぞれの過程に合わせ、マスターループリックを具体化したループリックに基づき、学校全体で育成する7つの資質・能力(コンピテンシー)のそれぞれについて、教員による適切な評価方法の在り方を研究した。そこで留意した点は次の通りである。

- (ア) 学校全体で育成する7つの資質・能力(コンピテンシー)をバランスよく評価、育成できるよう、単元評価計画を作成したこと。
- (イ) 具体化したループリックを、単元の当初に生徒に提示することにより、生徒に到達すべき点を示すこと。
- (ウ) 核となる技能(CS:Core Skill)の評価については、実際的评价材(作品及びパフォーマンス等)に基づき、グループ担当者を中心に評価すること。
- (エ) 核となる態度(CA:Core Attitude)の評価については、それぞれの評価場面でいずれかの資質・能力(コンピテンシー)を焦点化し、生徒個人に育まれるよい点や進歩の状況などを積極的に評価すること。
- (オ) 教員による評価と合わせて、生徒による自己評価や相互評価も積極的に行わせること。

様々な評価を組合せ、実施したうち、第2学年における学年末までに行った生徒の資質・能力(コンピテンシー)に関する自己評価の推移は、次の通りであった。

育成を目指す 資質・能力	CS (Core Skill)			CA (Core Attitude)			
	①論理的思考力	②課題設定力	③表現力	④積極性	⑤協働性	⑥柔軟性	⑦創造性
2年7月	2.6 (60.0%)	2.5 (51.3%)	2.6 (58.5%)	2.7 (61.1%)	2.8 (65.0%)	2.6 (56.7%)	2.4 (46.4%)
2年12月	2.8 (74.2%)	2.8 (70.7%)	2.8 (73.7%)	2.9 (76.3%)	3.1 (79.9%)	2.8 (67.6%)	2.6 (61.9%)
2年3月	3.1 (85.3%)	2.9 (80.1%)	3.0 (79.0%)	3.1 (80.7%)	3.3 (87.4%)	3.1 (80.1%)	2.9 (77.0%)

※平均値……4段階尺度で評価したものの平均値 ※肯定的評価の割合……「4」もしくは「3」と評価した生徒の割合

第1学年次と比較し、第2学年次では、生徒の資質・能力(コンピテンシー)について、探究の過程を経るにつれて、自己評価の平均値、肯定的評価の割合の数値のいずれもが上昇している。これは、第1学年次における探究活動とその振り返りを通じて、自身のそれぞれの資質・能力(コンピテンシー)に関して高めたメタ認知に基づき、新たな探究活動を行った結果、自己肯定感を高めることができた結果であると分析する。

⑥ 次年度計画への反映

第2学年での「社会探究活動」による探究活動の振り返りを通じて、「上手くいかなかった」ことを実感したり、次に「どのようにアクションを起こすべきか」を考えたりするなど更なる気づきを得た生徒も多い。これを踏まえて、第3学年では、「個人探究による課題研究の深化」をテーマとして、更なる探究活動を進めることとしている。これまでの指導と評価の経過を踏まえた指導計画を立案するとともに、具体化したループリックに基づき探究活動のそれぞれの過程に合わせた評価とそのフィードバックを継続して進めていくこととしている。

	評価の観点	探究の過程	評価場面、評価材
核と技能 なる (CS)	②課題設定力	課題の設定	研究計画書
	①論理的思考力	情報の収集	ワークシート
	①論理的思考力	整理・分析	Abstract
	③表現力	まとめ・表現	課題研究発表会
核と態度 なる (CA)	⑤協働性	課題の設定	デザイン発表会、普段の授業
	⑥柔軟性	情報の収集	デザイン発表会、普段の授業
	④積極性	整理・分析	課題研究発表会、普段の授業
	⑦創造性	まとめ・表現	課題研究発表会

成果

- ① 教育活動のあらゆる過程で「探究的な学び」を基底においた「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発
「総合的な探究の時間」では、学習目標の達成に向けて生徒一人一人が、主体的に根拠（エビデンス）をもってあらゆる場面で学習活動にあたらうとする、またその学習活動について振り返りを重視し次の学習活動へ進むという「探究的な学び」を進めようとする態度が醸成されつつある。
- ② 探究のスパイラルを理解し、概ね自律的に学習活動に取り組んだ生徒から他の生徒へ浸透させることによる“探究的な学びの学校文化”の醸成

課題

- ① 生徒の学びの質，“本気度”を高めるための、指導及びファシリテートの在り方
生徒が、「学びに向かう力」や動機を保ち続けたり、高めたりすることによって、主体的に質の高い探究的な学びや活動に向かわせ続けられるよう、教員の生徒に対するファシリテート力を高めるための指導の在り方を今後も模索し続けること。
- ② 教員による生徒の資質・能力（コンピテンシー）の評価とフィードバックの在り方
ルーブリックに基づく教員による資質・能力（コンピテンシー）の評価と、生徒の自己評価の数値には開きがみられることがある。また、適切なフィードバックの在り方や方法をどう進めるか。その評価の妥当性、生徒・保護者に対する説明責任、生徒のメタ認知や自己肯定感を高め、生徒の「学びに向かう力」を促していくことができるような評価活動の在り方を今後も模索し続けること。

次年度の目標（育成する資質・能力）及び取組内容

- ① 更なる「探究的な学び」を基底においた「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発
今年度の研究を通じて、第3学年での学習活動を見据えた「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発を進めてきたが、第2学年生徒に対する実際の指導を踏まえ、指導計画のアップデートを図ったうえでの継続性のあるカリキュラムを構築し、本校の3年間を見通した「総合的な探究の時間」のカリキュラムを完成させること。
また、これまでに引き続き、生徒一人一人の探究活動の質を上げ、主体的に取り組めるようにしていくための、教員の生徒に対するファシリテーターとしての指導力に関する研究とその実践を進めること。
- ② 目標と指導と評価の一体化をめざした資質・能力（コンピテンシー）の評価方法の研究
本校で定める「総合的な探究の時間」の目標の達成に向けて、探究活動の一連の過程のなかで適切な評価場面及び評価材を焦点化し、ルーブリックに基づき妥当性のある評価を進めていくための方法を確立させる。教師が生徒の学習活動を適切に評価するとともに、生徒自身が学習活動を積極的に自己評価及び他者評価を行い、生徒の「学びに向かう力、人間性等」やメタ認知を高める評価方法のあり方を構築する。